◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

愛媛県立図書館 読書会協力図書
新規受入セットのご紹介（一般向け） 令和2年版目録掲載

0 読書・雑書

063 最後の読書

津野海太郎著 新潮社 2018 年 262p

齢八十。人生の終わりを意識した時に浮かんだフレーズは、「最後の食卓」でも「最後の恋」でもなく、「最後の読書」だった―。編集者・図書館長等、本と共に生きてきた著者が、「硬い本はもう読めないよ」とぼやきつつも、鶴見俊輔、幸田文ら先人の言葉を読みほどく。全ての読書家への指南書として、読みごたえのある読書案内エッセイ。

4 自然をみつめる

477 歩き続ける力

三浦雄一郎著 双葉社 2019 年 177p

65 歳で余命3年の宣告を受けながらも 86 歳を迎えた三浦雄一郎さんは、スキーヤーで冒険家、エベレスト登頂の世界最高齢記録保持者でもある。その体力を支えた「歩く健康法」は、決して特殊なものではなかった。いつまでも健康でいられる「歩く力」を紹介する。2019 年 1 月の南米最高峰アコンカグアへの挑戦記も収録。

7 心のうるおい（趣味と芸術）

752 樹木希林 120 の遺言

樹木希林著 宝島社 2019 年 279p

2018 年に他界された女優の樹木希林さん。誰もが人生で直面する、老い、孤独、病、仕事、家族、夫婦関係等の問題に関して、樹木さんが生前に遺した 120 の言葉を掲載している。誰もが悩む「壁」をどう乗り越えればいいのか、樹木さんの人柄や考えが詰まった言葉がヒントを与えてくれるだろう。

9 詩歌・随筆・記録・外国文学

9401 きげんのいいリス

トーン・テレヘン著 新潮社 2018 年 149p

動物たちの何げない日常が描かれた連作短編集。リスは書いた手紙を風に乗せて送り、カメは一度でいいから吠えてみたいと願い、キリギリスは宇宙を跳び越える。1編2ページほどで次々に繰り広げられるテレヘンワールドは、くすっと笑えてどこかせつないような、少し不思議な世界に読者を誘う。

F 小説

F580 1R1分 34 秒

町屋良平著 新潮社 2019 年 140p

デビュー戦を初回KOで華々しく飾ってから二敗一分けと停滞しているボクサー。生きる意味を探しあぐね、鬱々と過ごす主人公の日々は、風変わりなトレーナー、ウメキチとの出会いで動き出す―。平仮名を多用した独特な文体や難解な描写に、違和感と同時に惹きつけられる。第 160 回芥川賞受賞作。

F581 ある男

平野啓一郎著 文藝春秋 2018 年 354p

弁護士の城戸はかつての依頼者・里枝から、亡夫に関する妙な相談を受ける。彼の死後、夫「谷口大祐」が全くの別人だったと判明したというのだ。城戸は、その男の正体を明かす調査にのめり込んでいく。人にとって、過去とは何なのか。作者が「最大のテーマは愛」と語る、読売文学賞小説賞受賞作。

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

愛媛県立図書館 読書会協力図書
新規受入セットのご紹介（一般向け） 令和2年版目録掲載

F582 むらさきのスカートの女

今村夏子著 朝日新聞出版 2019 年 158p

近所で有名な「むらさきのスカートの女」を「わたし」の目線で追った奇怪な物語。「わたし」は彼女と友だちになろうと、自分と同じ職場で働くよう仕向ける。常に彼女の動向を観察する「わたし」の視線に、読者は得体の知れない気味の悪さを感じていくだろう。果たして「わたし」を待つ結末とは……。第 161 回芥川賞受賞作。

F583 愛なき世界

三浦しをん著 中央公論新社 2018 年 447p

「植物には、脳も神経もありません。つまり、思考も感情もない。『愛』という概念がないのです。」シロイヌナズナの研究にすべてをささげると決めた、T大生物学研究室研究生の本村。そんな彼女に恋している洋食屋「円服亭」の住み込み店員の藤丸。二人を中心に、研究に打ち込む理系大学院生らの日常を描き、さわやかな読後感を呼ぶ小説。

F584 渦 妹背山婦女庭訓魂結び

大島真寿美著 文藝春秋 2019 年 361p

時は江戸時代。大阪は道頓堀で名を馳せた浄瑠璃作者・近松半二の一生を描いた時代小説。父の影響で浄瑠璃に魅せられた半二は、虚実が渦巻く芸の道にのめり込んでいく。渡世の浮き沈みに翻弄されながらも筆を取り続ける生涯は、まさに舞台のよう。義太夫節を思わせる語りで綴られた、第 161 回直木賞受賞作品。

F585 熱帯

森見登美彦著 文藝春秋 2018 年 523p

最後まで読んだ者がいない幻の本『熱帯』をめぐる小説。小説家の男は、記憶の彼方にあった『熱帯』を「沈黙読書会」で偶然見かける。所有していた女が本について語り始めるが……。『熱帯』とは一体どのような物語だったのか。解明にかかる者たちが記憶を頼りにもがくも、謎が謎を呼んでいく。もう一度読みたくなる魅惑の小説。

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆